歴博映像フォーラム19

同じ墓に入る人びと

沖縄県糸満の門中行事

令和8年
2月7日(土)

会場:国立歴史民俗博物館 講堂

歴博映像フォーラム19

同じ墓に入る人びと

沖縄県糸満の門中行事

日時：2026年2月7日（土）　10時～16時30分
会場：国立歴史民俗博物館 講堂
主催：国立歴史民俗博物館

プログラム

10:00 ～10:05　開会の挨拶
　西谷　大（国立歴史民俗博物館・館長）
10:05 ～10:10　趣旨説明
　内田　順子（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・教授）
10:10 ～11:10　上映　歴博研究映像『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』
　（1996年、抜粋・60分）
11:10 ～12:00　基調講演
　「同じ墓に入る人々－沖縄県糸満市字糸満の下茂腹門中－」
　金城　善（元糸満市立中央図書館長）
12:00 ～13:00　休憩
13:00 ～15:00　上映　歴博研究映像『墓をまもる－糸満・門中のいま－』
　（2026年、120分）
15:00 ～15:15　休憩
15:15 ～15:30　映像へのコメント
　金城　善
15:30 ～15:50　研究報告①「沖縄における葬墓制の変容と門中墓」
　山田　慎也（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・教授）
15:50 ～16:10　研究報告②「映像で記録する糸満の門中行事」
　春日　聡（多摩美術大学・非常勤講師／国立歴史民俗博物館・客員准教授）
16:10 ～16:25　研究報告③「『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』の撮影素材の特徴」
　内田　順子
16:25　閉会

総合司会
　川村　清志（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・准教授）

表紙
上から　幸地腹・赤比儀腹両門中墓 門開き（ジョーアキ）／幸地腹・赤比儀腹両門中墓 門開き／幸地腹・赤比儀腹両門中墓
裏表紙
幸地腹・赤比儀腹両門中墓の25年忌香盆

開催趣旨

内田 順子

歴博では、1988年度より民俗研究の一環として歴博研究映像の制作を開始しました。以降、フィールドワークによる研究成果を、研究者自身が映像制作に関わりながら、「映像による民俗誌」あるいは「映像による論文」としてまとめてきました。

共同研究「歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築－沖縄地域の映像を中心に」(2022～2024年度、代表：春日聡)では、沖縄地域の民俗文化を対象に制作された歴博研究映像を用いて再調査を行い、映像を通じて過去と現在を比較することの意義や、映像を記録として保存し、将来的にもアクセス可能な形で継承していくことの重要性について検討してきました。

これまでに制作した歴博研究映像32作品のうち、沖縄県の民俗や歴史をテーマとするものは、①『黒島民俗誌』、②『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』、③『沖縄の焼物　伝統の現在』、④『ブーンミの島』の4作品です。

本共同研究では、このうち①『黒島民俗誌』と②『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』を対象として、記録映像に基づく研究の可能性について検討を進めてきました。昨年度の歴博映像フォーラムでは、①『黒島民俗誌』に関する研究成果を報告しました。

今年度は、②に基づく研究により、新たに制作した歴博研究映像『墓をまもる－糸満・門中のいま－』の上映とあわせて成果を報告します。

歴博研究映像『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』(1995年度制作、1996年完成)は、沖縄・東アジア・東南アジアを研究対象として社会人類学・民俗学的研究に取り組み、多くの業績を残した比嘉政夫(1936–2009)氏によって制作されました。比嘉氏はその制作目的について、「門中成員が共有する〈門中墓〉が沖縄の他地域に比して多くみられる沖縄本島南部、とくに糸満における、門中墓を中心とする人々の結びつきやさまざまな行事における動きを記録したい」と述べています(比嘉政夫「門中墓と洗骨儀礼　民俗研究映像『沖縄・糸満の門中行事－神年頭と門開き－』」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集、1999年3月。映像題名に表記の違いあり)。

その制作から約30年が経過した現在、糸満における門中墓を中心とする人々の結びつきや行事のあり方は、どのように変化しているのでしょうか。歴博では、比嘉氏の映像記録を手がかりとして、糸満の門中行事の「現在」を研究課題とし、2022年度から調査・研究を進め、新たな研究映像『墓をまもる－糸満・門中のいま－』を制作しました。比嘉氏の時と同様、映像制作にご協力いただいた幸地腹門中と赤比儀腹門中の皆様に、心から御礼申し上げます。

本フォーラムでは、30年前に制作された記録映像と新たな研究映像をあわせて上映し、映像によって捉えられる糸満の門中の歴史と現在の姿を提示します。また、比嘉氏の映像制作とともに、今回の映像制作にもご協力いただいた金城善氏に、ご自身の門中である下茂腹門中を中心に、糸満の門中について基調講演をお願いしています。さらに、今回の映像制作において、葬墓制の観点からアプローチした山田慎也氏、共同研究の代表として映像の撮影・編集・監督を担った春日聡氏、映像素材の整理および制作統括を担当した内田から、研究報告を行います。

これらを通して、地域社会の変化を記録・継承する手段としての映像の意義や、民俗研究における映像活用の可能性について考える機会としていただければ幸いです。

登壇者の紹介

金城 善（元糸満市立中央図書館長）

・「ハル石の発見から『量地法式集』の研究に至るまで」、安里進・塚原東吾編『『量地法式集』の研究―影印・復刻・論考―』pp.247-257、神戸STS研究会、2024年
・「フランス人東洋学者シャルル・アグノエルが訪ねた昭和五年の糸満町：パトリック・ベイヴェール編『Okinawa 1930』を基に」『沖縄民俗研究』33、pp.25-49、2014年3月
・「同じ墓に入る人々―沖縄・糸満の親族集団―」『「ふるさとの伝承」解説編』、pp.222-229、株式会社示人社、1997年

山田 慎也（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・教授）

・『無縁社会の葬儀と墓―死者との過去・現在・未来』吉川弘文館、2022年（共編著）
・『民俗儀礼の変容に関する資料論的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第205集、2017年（編著）
・『現代日本の死と葬儀―葬祭業の展開と死生観の変容』東京大学出版会、2007年

春日 聡（多摩美術大学・非常勤講師、国立歴史民俗博物館・客員准教授）

・民俗研究映像『ブーンミの島』、監督：春日聡、製作・著作：国立歴史民俗博物館、2023年
・「祭祀芸能における〈音と超越性〉」、細川周平（編著）『音と耳から考える－歴史・身体・テクノロジー』pp.92-106、アルテスパブリッシング、2021年
・「祭祀芸能を記録する－民族誌映像における音の考察」『年刊　藝能』25、pp.41-52、藝能学会、2019年

内田 順子（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・教授）

・『映し出されたアイヌ文化－英国人医師マンローの伝えた映像』吉川弘文館、2020年
・『DVDブック 甦る民俗映像　渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』岩波書店、2016年（共編著）
・「映像の共有と諸権利：国立歴史民俗博物館における民俗研究を目的とした映像制作を事例として」『社会学評論』65(4)、pp.504-520、2015年3月

川村 清志（国立歴史民俗博物館・民俗研究系・准教授）

・「民俗文化からアートへ：現代における保存と活用のアルケミー」『日本民俗学』314、pp.88-97、2023年5月
・「節合される声とモノ、共創される「津波文化」：リアス・アーク美術館の震災展示から」『国立歴史民俗博物館研究報告』240、pp.201-259、2023年3月
・『スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」』現代企画室、2021年（共編著）

基調講演

同じ墓に入る人々 ―沖縄県糸満市字糸満の下茂腹門中―

金城　善

はじめに

沖縄県における父系親族集団の名称には、ムンチュー(門中)をはじめ、ハラ(腹)・チュチョーデー(一兄弟)・イチムン(一門)・ヒチ(引)などがある。

これらの父系親族集団を考えるときに重要なのは、近世琉球における身分制度である。それは、大きく「士(サムレー)」と「百姓」に分けることができる。士は「ユカッチュ」、「系持(チームチ)」とも称された。一方、百姓は「地人(ジーンチュ)」、「無系(ムチー)」と称された。宮古では系持を「ユカイピトゥ(ゆかりのある人の意)」と称するのに対し、百姓を「スマヌピトゥ(島の人)」と称した(仲宗根將二氏教示)。また、八重山では「ユカラピゥトゥ(良かる人の意)」に対し、「ブザ」と称した(宮城信勇著『石垣方言辞典』)。『沖縄古語大辞典』に「ふさ　下人。「まひと」(真人)に対する。八重山方言のブザに対応する」とある。

門中といっても、かつての首里・那覇・泊・久米の士の門中と、糸満市字糸満のような百姓の門中では、家族ごとに墓を所持するのか、村墓を使用するのか、あるいは一族でまたは複数の親族集団で１つの墓を使用するかなど、大きな違いがあり、分けて考えなければならない。「門中」ということばで、一括りにすることはできない。

一般的に門中は「始祖を共通にし、父系血縁によって結びつく集団(『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社)とか、「沖縄本島やその周辺の離島、八重山列島に存在する父系親族集団」(『日本語大辞典』講談社)などと説明されるが、私は30年前の平成７(1995)年12月10日にＮＨＫ教育テレビで放送された「ふるさとの伝承　同じ墓に入る人々―沖縄・糸満の親族集団―」からは、糸満の門中のことを「同じ墓に入る人々」として説明するようになった。それまでは門中をこのように表現したことはなかったように思う。

ここでは沖縄本島南部に位置する糸満市字糸満の下茂(スム)腹門中について、紹介したい。

１．糸満市字糸満の腹・門中について

字糸満の門中は、はじめ７腹(ナナハラ)に始まり、次に13腹となり、沖縄戦以前は42を数えたが、現在は40の門中となっている。「腹」は墓及び墓を維持する父系親族組織のことである。元々は「腹」と呼称されていたが、集団を意味する「中」を付けて、「腹中」と呼ばれるようになり、さらに「一門中」から変化した「門中」を連続して呼ぶようになり、現在では「何腹門中」と称するようになっている。１つの墓を１つの門中で使用しているところもあれば、いくつかの門中が共同で管理運営しているところもある。下茂腹門中もその中の１つである。

２．下茂腹門中と門中墓

下茂腹門中は、糸満市字大里の上ン門という家を出自としている。しかしながら、門中名からして、字大里の下茂からの分家であると考える方が妥当である。

下茂腹門中は、茂太(ムテー)腹門中と共同で門中墓を維持管理している。

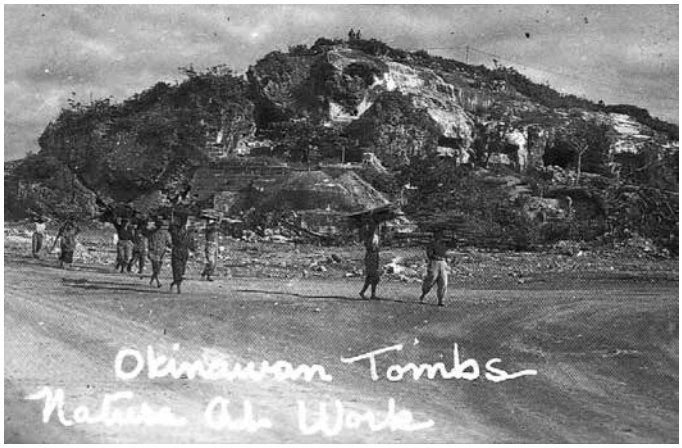
この両門中墓の向かって右隣(方言ではヒジャイ＝左)には南山王の墓があり、石棺が安置されている。

日本軍は戦時体制下で、門中墓のある山巓毛（サンティンモー）という琉球石灰岩の丘陵全体を陣地化するため、南山王の墓と隣接する４つの門中墓の内部を穿って連結し、そこに葬られていた遺骨を外に放り出した。戦後に米軍が撮った写真には、まだ正面が開いたままの状態であるが、捕虜収容所から戻った門中の人々はいち早く遺骨を墓に戻すとともに、横穴を閉じるなどの修復を行った。

南山王の石棺と厨子甕

下茂腹門中では、昭和22（1947）年に実施した修復工事を第１回とし、その後10年に１度の間隔で修復等を行っている。

第２回は昭和31（1956）年、第３回は同41（1966）年、第４回は同51（1976）年、第５回は同61（1986）年に行われた。平成８（1996）年には、戦後第６回・50周年のコーブン（香盆）として、正面入口の前に庇を延ばすとともに、階段や手すり等整備した。



沖縄戦で破壊された山巓毛の門中墓群

平成18（2006）年の第７回・60周年は、正面入口前の広場を拡張するとともに、掃除道具等を収納する倉庫をその下に設けた。

平成28（2016）年の第８回・70周年にも、正面入口前の広場の上に屋根を取り付け、納骨やジョーアキの洗骨の際に雨に打たれないようにした。

この工事で、墓の全面にグラスファイバーを２重に貼り、乳白色の塗料を２重塗りした５層の塗装工事を施し、今後30年は漆喰の塗り替えは行わなくても済むようにしたので、10年後のコーブンは実施しないこととした。

戦後１回目の修復（1947年）

第２回目の修復（1956年）

第６回・50周年の修復（1996年）

第７回・60周年の修復（2006年）

第８回・70周年の修復（2016年）

しかしながら、今年は第９回・80周年のコーブンの年にあたることから、墓の入口を拡張する工事を計画している。これまでの入口は幅60㎝に高さが100㎝と狭い。火葬が普及していないころは棺箱が入れられる大きさでよかったが、現代人は身長も高く、肥満気味の者も多くなり、納骨や洗骨の際に苦労している。幅110㎝に高さが150㎝に拡張し、観音開きの金属の扉に変更する予定である。ちなみに、かつては石の扉であったが、平成４（1992）年に開け方を誤り割ってしまった。そこで、勢理（シリー）腹門中墓で用いられていた鍵式の金属の扉を真似て、これに取り替えた。

平成18（2006）年の第７回・60周年の香盆の墓前のお供え物

３．下茂腹門中の年中祭祀と年度当番及び経費負担

下茂腹門中では、門中祭祀を担う年度当番として、書記会計のペークー２人と賄いを担当するアタイ４人を11年から13年間隔の輪番制でお願いし、門中祭祀を行ってきた。

平成31年・令和元（2019）年度の下茂腹門中の年中祭祀は、次のとおりであった。

旧暦正月２日	下茂・石垣および糸満ヌン殿内へ正月年頭祝い
旧暦正月３日	字真栄里の越地ヌン殿内や字大里の上ン門・山川ヌン殿内へ正月年頭マーイ
旧暦正月７日	ナンカンスークー（七日の祝い）
旧暦正月16日前の日曜日	墓掃除
旧暦正月16日	十六日墓参
新暦３月下旬	春の彼岸
旧暦２月15日	二月ウマチー（麦穂御祭）
旧暦３月	門中清明祭
旧暦３月15日	三月ウマチー（麦大御祭）
旧暦５月４日	ユッカヌヒー（糸満ハーレー）
旧暦５月15日	五月ウマチー（稲穂御祭）

旧暦６月15日　　六月ウマチー（稲大御祭）
旧暦７月　　七夕前の日曜日の墓掃除
旧暦７月７日　　七夕墓参
旧暦７月13日～15日　お盆
旧暦８月10日　　八月ウマチー、大毛小ウマチーまたは今帰仁御祭
新暦９月下旬　　秋の彼岸
旧暦10月20日　　ジョーアキ（洗骨）
新暦12月第１日曜　　門中委員会
新暦１月第２日曜日　下茂門中親睦会

令和５（2023）年の門中清明祭

令和２（2020）年に世界的に流行した新型コロナウィルスによって、年中祭祀も縮小しなければならなかった。コロナは人々の社会生活にも大きく変化をもたらした。

令和５（2023）年は、年度当番を依頼しても誰も引き受けてくれる者がなく、門中委員会として当番の負担軽減を模索し、年中祭祀のうち王府時代の名残である麦・稲等の５つのウマチーをはじめ、いくつかの祭祀を門中としては行わないこととし、門中会員の親睦と融和を図る旧正月のニントゥー（年頭）、年２回の墓掃除、門中清明（カミウシーミー）、ジョーアキ（洗骨のための門開き）、総会である親睦会は、これまでどおり実施するという改革案を策定した。それでも、当番のなり手は見つからず、１日5,000円による日当制で、門中祭祀を運営することにした。

ウマチーなどの門中祭祀を大幅に廃止したため、供え物の出費も当然ながら削減することになり、これまでの門中負担金の中で、満20歳から60歳までを対象に１名につき1,500円（内訳、300円×５回のウマチー）のウマチー割を廃止し、１世帯につき5,000円（正月年頭経費1,000円、門中清明経費1,000円、墓掃除1,000円、総会・親睦会経費2,000円）を会費として、各自が銀行振り込みすることにした。これまで、当番が各家庭に出向き徴収していたのは大変な負担であったが、これも解消された。

また、これまで全ての会員が門中墓の維持管理の経費であるンマリ（生まれ）割として、１名につき200円を負担してもらっていたが、銀行振込での端数の煩雑さをなくすため、これも廃止した。

４．下茂腹門中の会員の資格

下茂腹門中の運営は、古くから宗家の当主と若干名の委員によって行われてきた。幸地腹門中や赤比儀腹門中などが一般社団法人化していく中で、下茂腹門中は法人化することはなく、平成28（2016）年に門中規約を制定し、これに基づいて運営していくことにした。

会員は、門中名簿に登録し、世帯の年会費を納めていれば、死亡したときに門中墓に納骨される権利を有することを明確にした。

これまでは、婚出した女子は離婚しても門中墓に入れることはできなかったが、昨今の社会状況の変化により、子供もなく、夫の死亡後、その親族と折り合いが悪く、夫やその親族の墓に入れてほしくないとの申し出があり、委員会で審議した結果、実家の甥御の名簿におばとして登録してもらえば、死亡したときには甥御の親族によって門中墓に入れてもらうことした。

また、女子のみしかいない家庭は、その女子の子が家を継承し、会員として登録してあれば、その権利を有することとした。

５．ジョーアキの制度

昭和30(1955)年ごろに火葬が普及するまでは、人は死ぬと棺箱に納棺され、葬儀を経て門中墓のシルヒラシと呼ばれるところに安置され、洗骨の時を待った。遺族はいつになったら洗骨できるかを墓の中で状態を確認したという。今の時代では考えられないことではあるが、家族の死を洗骨によって浄化し、先祖と一体化させ、心の安堵を得たようである。

火葬が普及した後は、死者は火葬によって既に骨になっているが、次の死者がでるまではジョーバン(門番)と称して、墓の内部の入口のところに安置され、次の死者が入れられる前に洗骨の儀式を行い、先祖が葬られたイキ(池)に合葬された。そうなると、次に死者が出るのを待つことになり、遠いところへ出かけることもできないなど不都合が生じるようになった。字糸満の多くの人口を抱える幸地腹門中や上米次腹門中では、いち早くジョーアキという制度を考えだして洗骨を行うようになった。

下茂腹・茂太腹の両門中では、平成４(1992)年の旧暦10月20日からである。幸地腹・赤比儀腹両門中をはじめ、大殿内腹(ウールンチ)・与那城腹(ユナグスク)両門中や勢理腹門中が、旧暦10月20日にジョーアキというのをやっていたので、その制度を取り入れた。

主に１年以上前に亡くなって、シルヒラシの棚に安置されている遺骨を対象としている。

令和７(2025)年12月９日(旧暦10月20日)火曜日に行われたジョーアキには、下茂腹門中は９体、茂太腹門中は２体の洗骨し、納骨池に合葬した。

ジョーアキでお坊さんに読経をお願いする家はほとんどない。

１番から６番までの棚

トーシー墓の奥にあるイキ(納骨池)

下段が７番から19番、上段が20番から29番の棚

６．親睦会（総会）

昭和53（1978）年１月28日（旧暦12月20日）、レストラン大学飯店で開催された第１回下茂腹門中親睦会は、37名の男性のみの参加であった。

昭和53（1978）年の第１回下茂腹門中親睦会の参加者

その後、女性や子どもたちにも参加を呼びかけ、平成31（2019）年１月13日に西川町公民館で行われた下茂腹門中親睦会には、大人が79人に子どもが25人の合わせて104名の参加があった。新型コロナの感染拡大にともない、親睦会も自粛せざるを得なくなった。令和６（2024）年から再開したが、この間に多くの先輩がグソー（後生）へと旅立ち、参加者が少なくなった。

平成31（2019）年１月13日に西川町公民館で行われた下茂腹門中親睦会に参加した会員

おわりに

私は、52年前の昭和48（1973）年８月に、沖縄県教育委員会が文化庁の指導の下に実施した「糸満漁業民俗資料緊急調査」のときに案内役兼通訳として参加したことと、そして比嘉政夫先生が担当した「社会生活」の中の門中で、調査対象を下茂腹門中としていただいたことで、本格的に下茂腹門中と関わるようになった。そして、『下茂腹門中家系図』を編集することができ、30年前のＮＨＫの「ふるさとの伝承　同じ墓に入る人々」にも下茂腹門中を取り上げていただいた。今は糸満の歴史と文化研究会の主宰として、日々研究に勤しんでいる。

沖縄における葬墓制の変容と門中墓

山田　慎也

はじめに

沖縄は、長く琉球王朝の治世によって独自の文化を育んできた。そこでは、葬儀や墓のあり方についても当然ヤマトとは差異が生じている。こうした差異は近代化によって次第になくなっている部分も多いが、それでも現在、それなりの差異は存在し、また一見すると同じようではあるが、その背景は異なっている点などもある。そこで本報告ではこうした多様な状況について見ていくこととする。

1. 仏教と葬墓制

沖縄でもヤマトでも葬送儀礼において仏教の影響はある。ヤマトでは古代から中世にかけて死者供養に仏教が積極的に関与するようになっていく。とくに近世期になるとキリスト教の禁教対策として、寺請制度が敷かれるようになり、人々は必ずいずれかの仏教寺院の檀家となることが制度化された。その後近代になり、こうした制度自体はなくなったものの、寺檀制度は現在でも継続し死者供養と仏教はいまだ深い関係にある。

沖縄の場合には、仏教寺院が作られたり、また葬儀の中でも「ガン（龕）」とよばれる棺を運ぶための輿には地蔵などの仏像や蓮華が描かれ、また野辺送りのことを「ダビ（荼毘）」といったり、死後のことを「グショウ（後生）」などといったり（名嘉真・恵原　1979）、また「ニンブチャー（念仏者）」が念仏を唱えるなど、仏教の影響がないわけではない。しかしヤマトのように檀家制度自体はなく、僧侶がいない葬儀もよく行われており、ユタなどの民間宗教者が関与することもあった（古谷野　2019）。

現在、僧侶が葬儀を行うことが多くなっているが、葬儀の折に読経を依頼する際には、特定の寺院に決まっているわけではなく、葬儀社の紹介や地域の近くの寺院、また評判のよい僧侶など、その選択は極めて自由である。また必ずしも戒名が必要なわけではなく、位牌には生前の氏名が書かれることも多い。

2. 多様な葬具

かつて風葬の時代には、棺は膝を折って入れる寝棺であった。老人などは前もって自分で木を製材して板をつくり、天井などに保管していたという。八重山の川平や祖納では、棺の大きさは、横3尺6寸4分、縦1尺5寸４分、高さ1尺6寸4分であったという（名嘉真・恵原　1979）。1寸は約3センチであるので、縦は約110センチ、横約46センチ、高さ約50センチとかなり小さかった。しかし現在、火葬が浸透するとヤマトと同じような寝棺が使用されている。

また葬列を行っている時にはこうした棺を輿に納めて運んだ。これを「ガン（龕）」という。ガンは全面朱塗りでチャーギ（槙の木）で作られていた。仏画や蓮の絵などが描かれたり、仏画の描かれた垂れ布がつけられている。このガンを保管する小屋のことを「ガンヤー（龕屋）」と呼び集落の外れにあった。ガンは集落共有の物であったが、集落によっては持っていないところもあり、その場合には近隣の集落から借用して葬儀を行っていた。そしてガンは日常出し入れすることを強く忌み、葬式の時に出す際にも酒や花米を供え拝んでから出すという。また終わって納める場合にも「ガンマチ（龕祀り）」をして、再びガンが動かないことを祈願するなど、葬具自体にもかなり呪術的な力があると信じられていた。

また現在でも使用されているものに「メージク（前卓）」がある。これは位牌と香炉、造花や徳利など

を置く台であり、葬儀の時に墓に遺体や遺骨が納められると墓の前に置かれ、四十九日まで使用される。忌明けとなると片付けられる。とくに沖縄の場合には、位牌よりも香炉が重視されており、香炉の灰をとおして先祖や神と見なす場合が多い。そのため七日ごとにお参りに行き線香を供えるので、香炉には蓋が必要であり、糸満では蓋付きの缶が香炉として使われる場合も多い。

3. 火葬と告別式

かつて、沖縄の場合には亡くなってからなるべく早く葬儀を行う傾向があり、通夜をせずに朝亡くなるとその日に葬儀が行われ、墓に納められることもあった。通夜を行ったとしても死亡後24時間以内に墓に納められることもあり、中城村のある家では、昭和34年の葬儀で、昼に病院で亡くなりその晩は通夜をしたが、翌8時には葬儀を行い9時には墓に納められたという。しかし、平成19年の葬儀の時には、朝8時10分に亡くなりその晩に通夜を行い、翌日13時に火葬を実施したあと、その日の夕方葬儀を行って墓に納骨した(武井　2015)。

この平成の事例のように、沖縄の中南部では、火葬が導入されるようになると、葬儀当日に墓に納骨をするために、まず火葬を行ってから葬儀、告別式を行う、いわゆる骨葬の形態がとられることが多い(加藤　2010)。そのため、自宅で葬儀を行っていたときには、葬儀当日はまず自宅から出棺して火葬場に向かって火葬を行い、その後自宅に戻って遺骨を祭壇に安置して葬儀。告別式を行い、その後墓に納骨となった。そのため、火葬場への出棺の時と、墓への納骨の時と、近所や親戚の人々は2度見送りを行っていた。

その後、告別式を寺院や葬儀会館で行うようになると、朝自宅から出棺をして火葬場に行き、火葬場からそのまま寺院や葬儀会館に向かって告別式を行い、その後墓地に直接行って納骨となることが多い。そして現在でも通夜は自宅で行う人も多いが、最近は葬儀会館で通夜を行う人も次第に出てきている。

4. 葬儀後の供養

葬儀後は、初七日を「ハチナンカ」、「アラナンカ」などというが、この日までは毎日墓参りに行き、その後は七日ごとに四十九日まで墓参りをする。そして七日ごとに親戚や知人が喪家にお参りにやって来る。とくに初七日と四十九日は多くの人が香奠を持ってやってくるため、このときには、お弁当やおつゆなどの食事が振る舞われ、またお礼の品が渡される。

近年では、葬儀の小規模化によって、初七日法要と四十九日法要を近親者のみで行ったり、また初七日に四十九日法要をあわせて一緒に行ったり、葬儀当日に、初七日法要、四十九日法要まで行う場合なども出てきている。ただし、葬儀と初七日法要は、全く別の儀礼として沖縄の場合には現在でも認識されており、ヤマトのように、葬儀の時間に初七日法要を組み込んでしまう繰込初七日とは異なっている。

また四十九日には、49個の白餅が作られるが、これは人間の骨の数だといわれている。そのうち一つは大きな餅であり、これは人間の頭であるという。こうした習俗はヤマトでも四十九の餅として行われ、49の関節に釘を打たれないようによけるためなどといわれ、身体を連想させてる俗信がやはり伝えられている。

5. 墓の形態

沖縄の場合には、それを利用する人々の規模によって多様な墓の形態がある。ヤマトの場合には、ごく一部例外的な事例もあるが、基本的に家ごとであり、それが同族団によって集まっている場合であっても、墓の単位は家である。そして石塔を建てる形が一般的である。

しかし沖縄の場合には、家ごとの場合ももちろんあるが、今回の報告のように門中で共同の墓を持ちそこに門中の人々が入る門中墓や、模合墓(寄合墓)といい、血縁に関係なく人々がお互いに物資や労力を提供して墓を作り共同で使用するものもある。さらに村墓といい、村で共有のお墓を持っており、そこには村の人が入るなど、家単位だけでなく、多様な共同墓のありかたがみられるのである。また地域によっては、こうした多様な形態の墓が併存している場合もあるという(名嘉真・恵原1979)。

また墓の形態も単なる石塔墓ではなく、現在でも家型や亀甲墓など、ヤマトに比べ大型の収蔵空間を持つものが多い。これは遺体を土葬するのではなく、自然に骨化することを待つ風葬の影響が強いからであると考えられる。

写真1　龕と天蓋(沖縄県立博物館・美術館)

写真2　メージクと缶の香炉

写真3　葬儀社による葬儀の流れの説明(株式会社サンレー)

写真4　沖縄の家の墓(那覇市識名霊園)

写真5　亀甲墓(那覇市識名霊園)

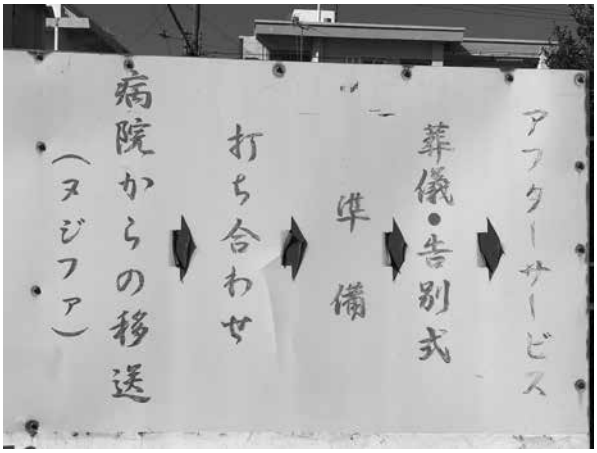


写真6　ヌジファも含む葬儀社の看板

参照文献

加藤正春　2010『奄美沖縄の火葬と葬墓制』榕樹書院
古谷野洋子　2019『八重山離島の葬儀』榕樹書院
塩月亮子　2008「沖縄における死の現在」『死の儀法』近藤功行・小松和彦編、ミネルヴァ書房
武井基晃　2015「葬送の変化と祖先祭祀行事の自動車社会化」『国立歴史民俗博物館研究報告』191集
名嘉真宜勝・恵原義盛　1979『沖縄・奄美の葬送・墓制』明玄書房

映像で記録する糸満の門中行事

春日　聡

1. はじめに　『墓をまもる―糸満・門中のいま―』制作経緯と概要

『墓をまもる―糸満・門中のいま―』(2026)(以下、『墓をまもる』)は、共同研究「歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築―沖縄地域の映像を中心に」(2022～2024年度　研究代表：春日 聡)を基盤として制作された映像作品である。本研究は、国立歴史民俗博物館(以下、歴博)が蓄積してきた研究映像アーカイブを、新たな研究テーマのもとで再活用する方法論の検討を主眼としている。

検討対象とした歴博研究映像は、沖縄地域を扱った『黒島民俗誌』(1993年｜制作：篠原 徹・菅 豊)、『沖縄・糸満の門中行事―門開きと神年頭―(じょーあきとかみねんとう)』(1996年｜制作：比嘉 政夫。以下、『糸満の門中行事』)、『沖縄の焼物(やちむん)』(2000年｜制作：松井 健・篠原 徹)、『ブーンミの島』(2023年｜監督：春日 聡)の4作品である。これらの映像資料を参照・活用しつつ、現地調査および新規撮影を行い、新たな映像記録を蓄積する計画を立てた。

その過程で、糸満の門中関係者との打ち合わせを重ねる中から、現在行われている門中行事そのものを映像で記録することへの要望が寄せられた。こうした声を受け、2023～2024年度にかけて、沖縄県内でも最大級の門中墓(もんちゅうばか)を共有する幸地腹(こうちばら)・赤比儀腹(あかひぎばら)両門中の協力のもと、糸満の門中行事を総合的に記録する映像制作を進めることとなった。

糸満地域において墓を共有する父系親族集団である「門中」は、本作で取り上げる幸地腹・赤比儀腹両門中を合わせると、成員数が4千名を超える大規模な親族組織である。糸満の門中は、長男・次男といった区別なく、血縁によって結ばれた父系親族全体で構成される点に特徴がある。長男以外が分家する首里・那覇系の門中とは異なり、構成人口がきわめて多い(大湾,2020,p127)。こうした門中を維持・継承するため、近年では一般社団法人化を進めるなど、1995年当時とは異なる運営形態が採られている。

以上を踏まえ、本作では当初の計画どおり、アーカイブ映像を参照しながら現地調査・撮影を行い、新たな映像記録を構築した。具体的には、『糸満の門中行事』(1996)において記録された「門中墓の清掃」、「ジョーアキ(墓の門開き)」、「カミニントゥ(神年頭)」を中心に、当時との比較研究の視点から調査・撮影を実施した。加えて、同作の撮影時には開催年が当たらなかった「25年忌香盆祭」(コーブン)では、墓や両門中宗家での準備段階、墓での祭祀、ホールでの式典の一部始終や、当時は記録されていなかった年中行事についても、新たに映像として収録した。さらに、糸満の関係者に過去の映像を視聴してもらいながら聞き取り調査を行い、それらの証言を反映させて本作『墓をまもる』(2026)を完成させた。

本作の目的は、地域社会における民俗や景観の変容を、映像を通して多角的に理解することにある。現地の人びとの体験、記憶、伝聞に基づく「現在の声」を記録し、将来へと手渡すことを重視した。同時に、制作年代の異なる映像作品の本編および未使用フッテージ(未編集素材)を引用し、現況と照合しながら一つの映像作品を構成している点に特徴がある。こうした手法は、これまでの歴博研究映像制作の中では前面化されてこなかった、新たな試みである。

2. 調査・撮影日程、内容

2023年(1年目)前半は、2022年末まで猛威をふるったCOVID-19の影響により現地調査が滞りがちであったが、同年後半はCOVID-19の沈静化の兆しが見え、年中行事のほかに「25年忌香盆祭」が

連続したため、調査・撮影を行った。

2024年(2年目)以降は、COVID-19の沈静化に伴い制限が緩和され、現地調査が実施しやすくなり、調査・撮影を進展させた。主な調査対象が墓を中心とした行事であることからセンシティブな内容を含むため、当初は難しいと考えていた現地調査・撮影について、関係者の協力を得られる見通しがたち具現化した。調査・撮影日程および内容を以下にまとめる。なお、本編では、すべての行事や撮影内容に触れているわけではない。

2023(令和5)年

10月21日(土)

・赤比儀腹門中　年中行事「9月ウハチー」調査・撮影。門中の役員たちがビンシー(酒を入れた徳利、花米などの供物をおさめた箱型の祭具)を携えて巡拝。巡拝順：①赤比儀腹門中宗家仏壇と神棚(1.グゥンス[元祖]2.ムートゥー[宗家の意。惣山(スーヤマ)とも呼称]の神棚の順。以下同様。)→②白銀堂(1.イビ[威部]2.カニマンウタキ[御嶽]3.ニーヌウカー[子の御川]4.ナカヌウカー[中の御川]の順)→③サンティンモー(山巓毛。1.東の香炉-A｜2.南の香炉｜3.西の香炉｜4.北の香炉｜5.東の香炉-Bの順)→④クガニムイ(黄金森)拝所→⑤トゥンチヤー(殿内屋。左・ノロ火ヌ神　右・地頭火ヌ神　中央は不明)→⑥ヌンドゥンチ(祝女殿内。左・ノロ火ヌ神｜中央・祝女殿内の3系統のシジ(男系)の祖先を祀るための3つの香炉｜右・白銀神。以下同様。)→⑦赤比儀腹門中宗家でウサンデー(直会)。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

10月22日(日)

・幸地腹門中宗家にて、聞き取り調査・撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

10月23日(月)

・幸地腹門中　年中行事「菊酒」および「真壁ムヌメー(物参)」調査・撮影。これらは同日に行われる個別の行事である。「真壁ムヌメー」は、門中の役員たちがビンシーを携えて巡拝。巡拝順：①幸地腹門中宗家→②白銀堂(イビ[威部])→③国吉のティラ(南禅廣寺)→④真壁宮→⑤ナーザトゥダキ(宮里嶽。真栄平拝所)→⑥天御人之御神瀬長拝所(瀬長のアカサチ森)→⑦白銀堂→⑧幸地腹門中宗家(門中の神棚｜仏壇)。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

・幸地腹門中墓にて、撮影のためのロケハンおよび聞き取り調査。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡)

11月11日(土)

・幸地腹・赤比儀腹両門中墓および「サンティンモー(山巓毛)」および「カミガー(神井)」・「アジガー(按司井)」、および幸地腹門中「フルバカ(古墓)」の調査・撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡)

11月12日(日)

・幸地腹・赤比儀腹両門中墓にて「ジョーアキ(門開き)前の清掃」調査・撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡)

11月18日(土)

・幸地腹門中・赤比儀腹両門中墓にて、「ジョーアキ(門開き)」の一環として行う「タビ(旅。糸満市外で亡くなった方)の納骨」の調査・撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡)

11月19日(日)

・幸地腹門中・赤比儀腹両門中墓にて、「ジョーアキ(門開き)」の調査・撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡)

11月25日(土)

・幸地腹門中・赤比儀腹門中の宗家にて、ペークー(書記会計役)とアタイ(当番役)の方々による「25

年忌香盆祭」準備の調査・撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

11月26日(日)

・幸地腹門中・赤比儀腹両門中墓にて、「25年忌香盆祭」の調査・撮影。「糸満市観光文化交流拠点施設くくる糸満」で行われた「25年忌香盆祭式典」の調査・撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

2024(令和6)年

2月9日(金)

・幸地腹門中宗家にて、旧正月2日「カミニントゥ(神年頭)」行事準備の調査・撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

2月10日(土)

・赤比儀腹門中宗家にて、旧正月元旦の「ハチカーミジナディ(初川水撫で)」・「カー(川)拝み」・「ミジトゥイ(若水取り)」の調査・撮影。神人と門中の役員たちがビンシー、ミキ、供物を携えて巡拝。カーでは役員がミジトゥイ(若水取り)を行う。巡拝順：①赤比儀腹門中宗家仏壇と神棚→②白銀堂(1.イビ[威部]2.カニマンウタキ[御嶽]3.ニーヌウカー[子の御川]4.ナカヌウカー[中の御川]の順)→③シリーンカー(勢理井)→④クラムトゥガー(蔵元井)→⑤マチンカー(市場井)→⑥ウスクガー→⑦トゥンチヤーヌカー(ウビーガー、殿内屋井)→⑧カミガー(神井)、アジガー(按司井)→⑨ハマガー(浜井)→⑩赤比儀腹門中宗家仏壇と神棚→⑪ウサンデー(直会)。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

2月11日(日)

・幸地腹門中宗家および赤比儀腹門中宗家にて、旧正月2日「カミニントゥ(神年頭)」行事の調査・撮影。この年は、幸地腹門中宗家に赤比儀腹門中役員3名が訪問し年頭挨拶を行い、次いで赤比儀腹門中宗家に幸地腹門中役員3名が訪問し年頭挨拶を行った。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

2月12日(月)

・赤比儀腹門中宗家にて、「神アシビー」行事の調査・撮影。巡拝順：①赤比儀腹門中宗家仏壇と神棚→②ヌンドゥンチ→③赤比儀腹門中宗家仏壇と神棚→④ウサンデー(直会)。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

5月11日(土)

・くくる糸満多目的室にて、金城 善氏へのインタビュー撮影。歴博研究映像『沖縄の門中－門開きと神年頭－』(1996)と関連して、①琉球・沖縄の門中の歴史の概要、②糸満における門中の特徴と歴史的展開、③門中と墓との関係、④門中の役割、⑤近年の変化等について。(聞き取り：内田 順子、撮影・録音：春日 聡)

6月9日(日)

・旧5月4日ユッカヌヒー「糸満ハーレー」調査・撮影(聞き取り、撮影：内田 順子)

7月20日(土)

・幸地腹門中「6月ウマチー」調査・撮影。門中の役員たちがビンシーと宗家で作ったミキと軽食を携えて巡拝。巡拝順：①幸地腹門中宗家→②白銀堂→③ヌンドゥンチ→④トゥンチヤー→⑤伊原ヌンドゥンチ(伊原拝所)→⑥白銀堂→⑦幸地腹門中宗家。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

7月21日(日)

・くくる糸満会議室にて、『糸満の門中行事』(1996)を幸地腹門中の現役員・元役員計7名に視聴して

もらいながら、撮影されている人物、現在と異なる点を中心に聞き取り調査およびインタビュー撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡、内田 順子)

12月22日(日)

・糸満市西区公民館にて幸地腹門中 第4回理事会の様子を撮影。終了後、上原 幸久氏(幸地腹門中理事長)のインタビュー撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：内田 順子)

2025(令和7)年

2月9日(日)

・午前：幸地腹・赤比儀腹両門中墓にて旧十六日行事前の墓掃除の撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡)

・午後：赤比儀腹門中宗家にて役員の方々に『糸満の門中行事』(1996)を視聴してもらいながら、聞き取り調査およびインタビュー撮影。(聞き取り：山田 慎也、撮影：春日 聡)

11月8日(土)

・歴博に金城 善氏を招待し編集作業中の映像を確認しながら構成案を検討。字幕や映像構成についての詳細な助言を得た。その中で、民俗語彙、民俗事象の確認、門中墓空間の名称の確認、『糸満の門中行事』(1996)および『墓をまもる』(2026)の登場人物の確認を行った。(聞き取り：山田 慎也、内田 順子、春日 聡)

12月13日(土)

・幸地腹・赤比儀腹両門中墓の撮影。空間構成の詳細が分かるように全体像やディティールを撮影。

・糸満漁港の風景を撮影。(撮影：春日 聡)

12月14日(日)

・幸地腹門中宗家に併設する理事会事務所にて、役員の方々に、『糸満の門中行事』(1996)で撮影された映像からキャプチャーした静止画像を参照してもらいながら、現在との比較について聞き取り調査・撮影。(聞き取り：山田 慎也、内田 順子、撮影：春日 聡)

・幸地腹・赤比儀腹両門中墓に移動し、現場を確認しながら、聞き取り調査・撮影。(聞き取り：山田 慎也、内田 順子、撮影：春日 聡)

・幸地腹・赤比儀腹両門中の年中行事に関係する場所の風景撮影。(撮影：春日 聡)

3. 本作が捉える糸満の門中行事の変容と映像記録の方法

■ 社会制度・儀礼実践・墓空間の変化から見る先行作品との比較

糸満の門中を記録した映像作品としては、研究映像『糸満の門中行事』(1996)のほか、NHK沖縄放送局制作『ふるさとの伝承　同じ墓に入る人々』(1995)が挙げられる。これら両作品において調査・制作に深く関わり、本作においても多大な協力を得たのが、金城 善(きんじょう・まさる)氏(元糸満市立中央図書館長)である

1995～1996年当時と2026年現在を比較した際、最も大きな変化の一つとして挙げられるのが、門中の一般社団法人化である。門中の維持・継承を目的として、制度面・運用面の見直しが進められ、組織運営の合理化が図られてきた。また、年中行事のあり方にも変化が見られる。

とりわけ本作において特筆すべき点は、「ジョーアキ」における洗骨儀礼の記録方法である。2023年以降、筆者らが実施した調査・撮影では、洗骨を行う遺族に映像記録のカメラが同行し、トーシー墓内部での人びとの様子を撮影した。1995～1996年の記録映像では、トーシー墓内部の別撮り映像は存在するものの、トーシー墓内部に調査者・撮影者が同行することはなかった。

現代の「ジョーアキ」では、火葬後に一時的に安置された骨壺をトーシー墓、あるいはシルヒラシ墓

から取り出し、墓庭の一角である「ギレー場」において洗骨儀礼を行う。昭和30年代以降、火葬が普及したことにより、実際の洗骨ではなく、遺骨を泡盛で清め白紙に包む所作が中心となっている。その後、遺骨はトーシー墓内部の「イキ(池)」に納められ、グソー(後生)の先祖たちと合祀される。両門中の役員および遺族の協力により、本作ではこの一連の過程を映像として記録した。また、かつては禁じられていたトーシー墓内部への女性の立ち入りが認められている点も、現代における「ジョーアキ」の重要な変化として確認できる。

さらに、この30年間に行われた複数回の「普請」により、門中墓の空間構成そのものも変化している。門中墓の大規模な改修は、25年忌および33年忌の香盆祭に合わせて実施される。香盆は一般の年忌供養に相当し、墓を新築した年を起点として1、3、7、13、25、33年目に営まれる。とりわけ25年忌と33年忌は「大香盆」と呼ばれ、墓の改修工事とともに、祖先への供物や歌舞音曲の奉納を伴う盛大な祝祭が行われる。

前回の33年忌香盆祭(1998年)に際しては、「ギレー場」の拡張・改修、駐車場の整備、2棟あった「ワラビ墓(童墓)」のうち1棟の撤去と納骨堂の建て替えなど、大規模な改修が行われた。続く25年忌香盆祭(2023年)に合わせては、墓地周辺の高圧洗浄、階段のスロープ化、墓側面の漆喰補修などが実施されている。本作では、こうした空間的変化についても、映像による比較が可能となっている。

■ 映像メディア環境の変遷を踏まえた記録手法と表現構成の差異

本作の制作にあたっては、映像メディアそのものの変遷にも留意する必要がある。1995～1996年当時と2026年現在とでは、記録方式、画面サイズ、アスペクト比が大きく異なる。かつてはアナログ方式のベータカムビデオテープが用いられていたが、現在ではデジタル方式のメモリ記録が主流となっている。

『糸満の門中行事』(1996)および『同じ墓に入る人々』(1995)は、ナレーションによって場面や事象を説明する構成が採られており、字幕は最小限にとどめられている。これは、当時一般的であったNTSC方式テレビ放送の画面仕様、すなわちアスペクト比1.33:1(4:3)、20～29インチ程度のブラウン管テレビ、水平解像度約500本という表示環境に依拠していたためである。この環境では、大量の文字情報を高い可読性で提示することは困難であった。

2006年以降に普及した地上デジタル放送では、アスペクト比1.78:1(16:9)のハイビジョン画面が標準となり、表示面積が大きく拡張された。また、デジタル化により水平解像度という概念自体が意味を失い、映像上に重ねられる文字情報の質・量ともに大幅な向上が可能となった。学術映像においては、登場人物の発話内容や専門用語、事象の説明など、文字情報が不可欠な場面が多い。

以上を踏まえ、本作ではナレーションを用いず、登場人物のすべての音声を文字起こしし、音声字幕および説明字幕として表示する構成を採用した。これは、情報の正確な共有を図ると同時に、「聞こえ」に支援や配慮を必要とする人々にも配慮した映像提示を実現するためである。

おわりに

本作は、沖縄に分布する門中の一事例として糸満の門中行事を具体的に記録したものである。上映や教育・研究での活用を通じて、門中の多様性や地域的特質への理解を促すとともに、年中祭祀や葬墓制といった民俗実践への関心を深めることが期待される。また、将来、国立歴史民俗博物館において新たな研究映像が制作される際には、本作が比較・再検証の基盤となり、琉球弧における民俗研究の深化に資することを期待したい。

参考文献（著者50音順）

25年忌香盆実行委員会　2024『幸地腹門中・赤比儀腹門中 25年忌香盆祭 記録集』
糸満市教育委員会　1996『沖縄・糸満の昔話』
糸満市史編集委員会　1991『糸満市史　資料編12 民俗資料』
糸満市史編集委員会　2016『糸満市史 資料編13 村落資料 旧糸満町編』
大湾ゆかり　2020「糸満市上米次腹門中の墓とジョーアキー（墓開き）儀礼について」（『沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要』, No.13, pp.127-138）
小熊誠　2023『沖縄における門中の歴史民俗的研究』（風響社）
津波一秋　2022「火葬後の洗骨改葬に関する問題の可視化と再定位　那覇市小禄地区の事例研究から」（『国立歴史民俗博物館研究報告　第234 集』pp. 367-392）
比嘉政夫　1983『沖縄の門中と村落祭祀』（三一書房）
比嘉政夫　1987『女性優位と男性原理－沖縄の民俗社会構造』（凱風社）
比嘉政夫　1999「門中墓と洗骨儀礼　民俗研究映像「沖縄・糸満の門中行事－神年頭と門開き－」（『国立歴史民俗博物館研究報告　第82集』pp.237-244）

参照映像（公開年順）

歴博研究映像

『黒島民俗誌』　1993｜制作：篠原 徹・菅 豊
『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』　1996｜制作：比嘉 政夫
『沖縄の焼物（やちむん）』　2000｜制作：松井 健・篠原 徹
『ブーンミの島』　2023｜監督：春日 聡

NHK

『ふるさとの伝承　同じ墓に入る人々　沖縄・糸満の親族集団』　1995｜構成：新城 裕子、制作統括：大濱 聡
『ふるさとの伝承　糸満の追い込み漁』　1995｜構成：柳田 真顕、制作統括：大濱 聡
いずれも制作協力：NHKエンタープライズ21、制作・著作：NHK 沖縄

『沖縄・糸満の門中行事 －門開きと神年頭－』の撮影素材の特徴

内田 順子

はじめに

本報告は、国立歴史民俗博物館が制作した研究映像『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』（1995年度制作、1996年完成）を対象として、その撮影素材の特徴を明らかにすることを目的とする。本映像は、社会人類学・民俗学の立場から沖縄地域を長年研究してきた比嘉政夫によって制作され、糸満地域における門中と門中墓を中心とする祖先祭祀および年中行事の実態を、映像によって記録しようと試みたものである。本報告にあたっては、比嘉が本映像の制作趣旨に触れている「門中墓と洗骨儀礼－民俗研究映像『沖縄・糸満の門中行事－神年頭と門開き－』制作から」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集、1999年）を参照する。

比嘉政夫の映像制作のねらい

比嘉政夫は本論文の冒頭において、自身の関心が、「門中」および「門中墓」を中心とする祖先祭祀と社会関係の解明にあることを示している。糸満は、「門中成員が共有する〈門中墓〉」が多くみられる地域であり、そうした糸満において、「門中墓を中心とする人々の結びつきやさまざまな行事における動きを記録したいと念じていたので、糸満の幸地腹、赤比儀腹、両門中の祖先を祀る行事を記録することにした」と述べている（237頁）。

この制作意図に基づき、比嘉は、「門中墓を中心とする人々の結びつきやさまざまな行事における動き」の記録として、墓掃除、門開き、旧正月の行事をカメラにおさめている。とくに門開きについては詳しく映像で記録を残し、その映像に基づいて、門開きのプロセスを詳しく記述している。

また比嘉は、この映像制作では、共同での墓所有の形態が「どのような歴史の中で生まれてきたのか」についての「歴史を探る資料として役立つこと」を意図したと述べている（238頁）。門中墓や洗骨儀礼の歴史的形成過程を探るための資料となること企図した映像制作であったようである。幸地腹・赤比儀腹門中の系譜に関わる資料や、幸地腹門中の規約をまとめた『幸地門中諸制度』等の資料を映像で記録し、それを作品の中でかなりの時間を割いて紹介しているのは、この映像が「歴史を探る資料として役立つこと」をねらっていたためかもしれない。

『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』（110分）の概要

【映像に記載のクレジット】

協力　糸満市教育委員会
　　幸地腹門中
　　赤比儀腹門中
企画　国立歴史民俗博物館
製作　毎日映画社

【撮影期間】

1995年11月21日～11月26日（7日間）

1995年12月12日～12月17日（6日間）
1996年2月19日～ 2月21日（３日間）
合計16日間

撮影年の1995年は、幸地腹・赤比儀腹門中墓の25年忌香盆（1991年）の4年後であり、33年忌香盆（1999年）の5年前である。香盆とは、墓の創設年（新築年）を起点として、人の死後の年忌と同じ周期で行う墓の祭祀で（10年ごとに行う門中もある）、香盆の年に墓の修理や改築が行われる。幸地腹・赤比儀腹門中墓は、1999年の33年忌香盆の際、ギレー場、納骨堂、童墓等の取り壊し・改築のほか、墓の入り口の石造りの戸を鍵付きの扉に変更するなど、大きく変更された。比嘉の映像は、その大きな変更前の幸地腹・赤比儀腹門中墓の様子を伝える歴史資料となっている。

【作品の構成】
① 糸満の概要（地理的特徴、主な生業、街並みの変化等）
② 墓の特徴
③ 幸地腹・赤比儀腹門中墓の掃除
④ 門中とは
⑤ 墓掃除参加者の確認
⑥ 幸地腹・赤比儀腹門中墓の構成
⑦ 幸地腹門中宗家の神棚、遠い先祖・近い先祖を祀る仏壇
⑧ 幸地腹由来起
⑨ 幸地腹門中系統図
⑩ 幸地門中諸制度
⑪ 門中諸行事
⑫ 赤比儀腹門中宗家の神棚、遠い先祖・近い先祖を祀る仏壇
⑬ 赤比儀腹門中の系譜、肖像画
⑭ 門開き（掃除、供物、テントはり、扉を開ける、訪れる家族、洗骨、墓の中、人々の様子、童墓、墓を閉じる、片付け、役員インタビューなど）
⑮ 幸地腹門中の役員会
⑯ 旧正月（糸満漁港の様子、白銀堂をお参りする人々、シリーンカーでの若水汲み）
⑰ 旧正月二日の神年頭（幸地腹宗家、赤比儀腹宗家、ノロ殿内）

『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』の撮影素材の特徴（撮影素材リストは表１を参照）
- 撮影テープはベータカム30分×43本（約1,290分、約21時間30分）
- 研究映像として作品に使用されたのは110分で、全体の約8.52%
- 撮影素材テープのうち、洗骨が行われる門開きの日の撮影素材が最も多い。とくにこの日は、カメラ2台で撮影しており、幸地腹・赤比儀腹門中墓の広い敷地内で同時並行的に生じる出来事を、それぞれの場面に即して記録しようとする意図が感じられる。また、門開き前の墓掃除や、旧正月二日の神年頭行事も複数のテープにまたがって撮影されている。「門中墓を中心とする人々の結びつきやさまざまな行事における動きを記録したい」という、映像制作のねらいがここに見てとれる。
- 『幸地腹由来記』などの資料撮影も多く実施している。完成版にも活用されている。
- 糸満の魚市場などの様子も撮影されているが、完成版には使われていない。

写真１　赤比儀腹の神年頭で神子に
聞取りをする比嘉政夫氏（R42）

写真２　魚市場（R34）

写真３　魚市場（R34）

写真４　中央市場（R35）

おわりに

比嘉政夫の『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』の撮影素材の内容からは、門中墓を中心とする人々の関係性や行事の進行を、連続的かつ多面的に記録しようとする制作意図がうかがえる。また、完成作品には含まれていない、糸満の生活風景も記録されている。今後は、こうした撮影素材の活用のあり方について、さらなる検討が求められよう。

テープ番号	撮影年月日	テープの種類	内容詳細
R1	1995年11月21日	FUJI H321E Betacam 30	山巓毛(さんてぃんもー)より糸満市全景、祈る人々、細い路地(子どもたち)、漁港全景(船、漁師)、サバニの走り(遠目)TC01H～　音声カメラマイク　祭
R2	1995年11月21日 1995年11月22日	FUJI H321E Betacam 30	1995年11月21日：漁港全景(船、漁師等)、嘉手志川(井戸)周辺の情景数カット　TC02～　音声カメラマイク 1995年11月22日：嘉手志川(井戸)、つり人親子イメージカット、赤瓦屋根バックの路地(歩いている子どもたち)、門中墓　TC02:13:36:13H～　音声マイク
R3	1995年11月22日	FUJI H321E Betacam 30	門中墓(ハイビスカス等)　TC03H～　音声マイク
R4	1995年11月22日	FUJI H321E Betacam 30	門中墓　TC04H～　音声マイク
R5	1995年11月22日	FUJI H321E Betacam 30	門中墓、幸地腹由来記(資料接写)　TC05H～
R6	1995年11月22日	FUJI H321E Betacam 30	幸地腹由来記(資料接写)
R7	1995年11月22日	FUJI H321E Betacam 30	幸地腹由来記(資料接写)
R8	1995年11月23日	FUJI H321E Betacam 30	シーサー(情景)、ノロの屋敷全景、写真接写資料等々
R9	1995年11月24日	FUJI H321E Betacam 30	漁港、報得川周辺、大殿内、路地
R10	1995年11月24日	FUJI H321E Betacam 30	実景(R9つづき)
R11	1995年11月26日	FUJI H321E Betacam 30	墓そうじ、朝の表情等々　TC11H～　音声CH-1ガンマイク
R12	1995年11月26日	FUJI H321E Betacam 30	墓そうじの様子(休憩)　TC12H～　音声CH-1ガンマイク
R13	1995年11月26日	FUJI H321E Betacam 30	幸地腹門中墓そうじ(出席確認)、墓実景、松の木　TC13H～　音声CH-1ガンマイク
R14	1995年11月26日	FUJI H321E Betacam 30	幸地腹門中墓実景(天気晴れ)、糸満市街全景、雲、空、つり人、シーサー、古い路地、南山城、照屋城全景　TC14H～
R15	1995年11月26日	FUJI H321E Betacam 30	南山城情景、糸満漁港(夕日、サバニ)　TC15H～
R16	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　墓そうじ～開けるまで、洗骨　CH-1ガン　TCフリーラン　Aカメ
R17	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　CH-1ガン　TCスレーブ、フリーラン　Aカメ
R18	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　CH-1ガン　TCスレーブ、フリーラン　Aカメ
R19	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　CH-1ガン　TCフリーラン、スレーブ　Aカメ
R20	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　音声CH-1ガン　TCスレーブ、フリーラン　Aカメ
R21	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き、インタビュー　CH-1ガン、CH-2ピンマイク　TCスレーブ、フリーラン　Aカメ
R22	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　TCスレーブ、フリーラン　Bカメ
R23	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　TCフリーラン　Bカメ
R24	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　TCフリーラン　Bカメ
R25	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　TCフリーラン　Bカメ
R26	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　TCフリーラン　Bカメ
R27	1995年12月12日	FUJI H321E Betacam 30	門開き　TCフリーラン　Bカメ
R28	1995年12月13日	FUJI H321E Betacam 30	資料撮り(掛軸等)　骨壺写真について(3個、撮影順序は次男、長男、三男の順)
R29	1995年12月13日	FUJI H321E Betacam 30	古いお墓(北名城ビーチにて)、海実景、糸満(船上撮影)、夕景
R30	1995年12月13日	FUJI H321E Betacam 30	夕景(漁船等)
R31	1995年12月14日	FUJI H321E Betacam 30	南山城より糸満全景、南山城内情景、祈る人々、嘉手志川俯瞰全景、瓦屋根情景
R32	1995年12月14日	FUJI H321E Betacam 30	赤瓦屋根のシーサー、嘉手志川情景、糸満市俯瞰全景赤瓦情景カット、亀甲墓全景(後方より)前方など
R33	1995年12月14日	FUJI H321E Betacam 30	嘉手志川情景、祈る人々、墓(日本墓全景)、さとうきびの花、雲空
R34	1995年12月15日	FUJI H321E Betacam 30	糸満魚市場
R35	1995年12月15日	FUJI H321E Betacam 30	糸満市場
R36	1995年12月17日	FUJI H321E Betacam 30	幸地腹門中総会
R37	1996年2月19日	FUJI H321E Betacam 30	旧1月1日白銀堂初詣の様子、若水(井戸)
R38	1996年2月19日	FUJI H321E Betacam 30	旧１月1日白銀堂参拝の様子、漁港大漁旗、魚市場看板
R39	1996年2月20日	FUJI H321E Betacam 30	旧１月2日神年頭　しめなわ、門松、幸地腹宗家仏壇、あいさつまわり
R40	1996年2月20日	FUJI H321E Betacam 30	旧１月2日神年頭　幸地腹宗家、赤比儀腹門中インタビュー
R41	1996年2月20日	FUJI H321E Betacam 30	旧１月2日神年頭　ノロドゥンチ
R42	1996年2月20日	FUJI H321E Betacam 30	旧１月2日神年頭　赤比儀腹門中、中門中、門松、報得川
R43	1996年2月21日	FUJI H321E Betacam 30	報得川、接写(地図、古い糸満の写真スチール5カット)

表1　『沖縄・糸満の門中行事－門開きと神年頭－』撮影素材リスト

国立歴史民俗博物館の研究映像

歴博では1988年より、民俗研究の一環として「民俗研究映像」の制作をおこなってきました。①現在の民俗の記録であること、②民俗誌的な映像記録であること、③研究資料としての映像記録であること、そして④研究成果の発表の手段としての映像による論文であること、という基本方針のもと、制作担当者である研究者自身が、企画から完成までの全てのプロセスに関わり、撮影や編集など、それぞれの研究対象に応じた工夫を凝らし、制作している学術映像です。現在、「歴博研究映像」として受け継がれています。

歴博研究映像一覧表

制作年度	題名	制作担当者	規格
昭和63年度	芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―	上野和男 岩本通弥 橋本裕之	カラー・日本語・100分
昭和64年度	鹿嶋様の村―秋田県湯沢市岩崎民俗誌―	岩井宏實 福原敏男	カラー・日本語・59分
平成2年度	椎葉民俗音楽誌1990	小島美子	カラー・日本語・120分
平成3年度	金沢七連区民俗誌　第1部　都市に生きる人々 第2部　技術を語る	小林忠雄 菅豊	カラー・日本語・70分 カラー・日本語・45分
平成4年度	黒島民俗誌―島譜のなかの神々― 黒島民俗誌―牛と海の賦―	篠原徹 菅豊	カラー・日本語・60分 カラー・日本語・60分
平成5年度	景観の民俗誌　東のムラ・西のムラ	福田アジオ 篠原徹 菅豊	カラー・日本語・各58分
平成6年度	観光と民俗文化―遠野民俗誌94/95― 民俗文化の自己表現―遠野民俗誌94/95― 遠野の語りべたち	川森博司	カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・29分
平成7年度	沖縄・糸満の門中行事―門開きと神年頭―	比嘉政夫	カラー・日本語・110分
平成8年度	芸北神楽民俗誌　第1部　伝承 芸北神楽民俗誌　第2部　創造 芸北神楽民俗誌　第3部　花	新谷尚紀	カラー・日本語・45分 カラー・日本語・48分 カラー・日本語・29分
平成9年度	風の盆ふぃーりんぐ―越中八尾マチ場民俗誌―	小林忠雄	カラー・日本語・90分
平成10年度	大柳生民俗誌　第1部　宮座と長老 大柳生民俗誌　第2部　両墓制と盆行事 大柳生民俗誌　第3部　村境の勧請縄	新谷尚紀 関沢まゆみ	カラー・日本語・70分 カラー・日本語・36分 カラー・日本語・16分
平成11年度	沖縄の焼物－伝統の現在	松井健 篠原徹	カラー・日本語・83分
平成12年度	風流のまつり　長崎くんち	福原敏男 久留島浩 植木行宣	カラー・日本語・94分
平成13年度	金物の町・三条民俗誌	朝岡康二 内田順子	カラー・日本語・90分
平成14年度	物部の民俗といざなぎ流御祈祷	松尾恒一 常光徹	カラー・日本語・83分
平成15年度	出雲の神々と祭り　第1部　美保神社 出雲の神々と祭り　第2部　佐太神社 出雲の神々と祭り　第3部　荒神祭り	関沢まゆみ 新谷尚紀	カラー・日本語・52分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・15分

制作年度	題名	制作担当者	規格
平成16年度	現代の葬送儀礼 地域社会の変容と葬祭業―長野県飯田下伊那地方 葬儀用品問屋と情報 収骨器の製造―愛知県瀬戸市 葬儀用繊維用品の製造―福井県福井市	山田慎也	カラー・日本語・46分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分
平成17年度	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの	内田順子 鈴木由紀	カラー・日本語・102分
平成18年度	伝統鴨猟と人々の関わり ―加賀市片野鴨池の坂網猟―	安室知	カラー・日本語・37分
平成19年度	興福寺　春日大社 ―神仏習合の祭儀と支える人々― 薬師寺　花会式―行法と支える人々―	松尾恒一	カラー・日本語・71分 カラー・日本語・71分
平成20年度	筆記の近代誌―万年筆をめぐる人びと―〔本編〕 筆記の近代誌―万年筆をめぐる人びと―〔列伝篇〕	小池淳一	カラー・日本語・52分 カラー・日本語・99分
平成21年度	平成の酒造り〔製造編〕 平成の酒造り〔継承・革新編〕	青木隆浩	カラー・日本語・88分 カラー・日本語・88分
平成22年度	アイヌ文化の伝承―平取 2010 アイヌ文化の伝承―白老 2010	内田順子	カラー・日本語・40分 カラー・日本語・40分
平成23年度	比婆荒神神楽―地域と信仰―	松尾恒一	カラー・日本語・69分
平成24年度	石を切る―花崗岩採掘の伝統と革新―〔本編〕 石を切る―花崗岩採掘の伝統と革新―〔技術編〕 石を切る―花崗岩採掘の伝統と革新 ―〔インタビュー編〕	松田睦彦	カラー・日本語・69分 カラー・日本語・51分 カラー・日本語・59分
平成25年度	盆行事とその地域差―盆棚に注目して― 土葬から火葬へ―両墓制の終焉― 甑島の盆行事	関沢まゆみ	カラー・日本語・50分 カラー・日本語・28分 カラー・日本語・20分
平成26年度	屋久島の森に眠る人々の記憶	柴崎茂光	カラー・日本語・80分
平成27年度	明日に向かって曳け ―石川県輪島市皆月山王祭の現在―	川村清志	カラー・日本語・102分
平成28年度	モノ語る人びと　津波被災地・気仙沼から	葉山茂	カラー・日本語・63分
平成29年度	二五穴―この水はどこへ行くのか― 二五穴―水と米を巡る人びとの過去・現在・未来――	西谷大 島立理子 内田順子	カラー・日本語・20分 カラー・日本語・40分
平成30年度	からむしのこえ	分藤大翼	カラー・日本語・93分
令和4年度	ブーンミの島	春日聡	カラー・日本語・113分
令和7年度	墓をまもる－糸満・門中のいま－	春日聡	カラー・日本語・120分

ご案内

【催事のご案内】※聴講無料　場所：国立歴史民俗博物館　講堂

・第466回歴博講演会「都城の生活史－これからの王宮・王都研究－」
　2026年2月14日（土）13：00 ～15：00
　講師：林部　均（国立歴史民俗博物館・考古研究系・教授）
・第467回歴博講演会「文化財科学からみた冶金と金属工芸」
　2026年3月14日（土）13：00 ～15：00
　講師：齋藤　努（国立歴史民俗博物館・情報資料研究系・教授）

【歴博の情報発信】

国立歴史民俗博物館の総合展示・企画展示・特集展示・フォーラム・講演会等の情報は、ウェブサイト・X（旧Twitter）・YouTube・ニューズレター（メルマガ）でもご案内しています。

○ウェブサイト	https://www.rekihaku.ac.jp
○ X（旧Twitter）	@rekihaku
○ YouTube	https://www.youtube.com/@NMJH
○ニューズレター	ウェブサイトのトップ画面右上にあるアイコンより「歴博とは」のページを開きます。下にスクロールして表示される登録画面よりメールアドレスを送信してください。

歴博映像フォーラム19

同じ墓に入る人びと－沖縄県糸満の門中行事

発　行　日　　2026年2月7日
編集・発行　　国立歴史民俗博物館
　　〒285-8502　千葉県佐倉市城内町117
　　Tel.043-486-0123（代）

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History

ISBN 978-4-909293-31-2

9784909293312